明烏後正夢發端

中

ヘ 13
2909
2

# 教訓郭里の東雲巻之中

江戸

楚満人改 為永春水華刪

松亭金水稿本

## 葉櫻の段

伊勢の海に釣する蜑のうけならねや心一つと定めかねつるもとは昔の人の口ずさみ。遊女夜發の筆ハ。えより一時の戯まふく。就中道端の小傾城。誰彼といふ嫌ひもなく。盃夜三分ハ三分でござい。

門 へ 13
號 2909
巻 2
昭和九年七月二十一日

一分ハ一分二朱ハ二朱。金でさへ光る家内の本尊。金が妓女か妓女が金か。悟つてみれバ禅家の和尚これハ本来無一物。迷つてみれバあさ人の。狐狸の毛がまじる筆を便りに嘘八百かいてまつて口紅の。裂めに残る文ハ。中将姫の曼陀羅より。定家が小倉の色紙より。何よりかより是なとの。宝ハ門藤八房の蕃椒よりまで辛い浮世に惜まだ浅金をつかひ損るハ此うち



なり。それなるかあくまる人ハ。あと先みずの血氣にそなる。若げのいたりの分別ざかりの親方株城ハ杖つく親司もあり。こゝな郭里へいりこむ人ありこそいみじき。又通じての艶郎とうろ。やわね人ハ一りもなし。是で浮世まゝりお。ころ時二郎ハ不圖して。列深きさる浦里がどうしも縁で其の人に。あつて初手からなじみ身にしみぐくと惚れそと。雀賀の節ハ仇るがど。

あざまハあらね二人がなか。あちこちの労様も。
詮方なきさる胸のうち。殊ニ時二郎ハ親がゝり。高
のしまる身はまゝならなくまたハおさなき親類縁者も。
かゝりなくして其尾がきれてあへのも恋のくせ侭
促うけるは苦しさ内にゐるふも居られバこそその
ねどいハ友どちの文志が所を隠し家と要時ハ特
食客人。茶屋にもおなく下まの勘定十四五両か
二十両自まへ出せバ困りました。どうぞ勘定して呉と

真綿で首のしまるく侭促。ねけつ潜つゐ訳も。
今ハ詮方なき夜のだんハ格子さきへもらく
ゆうまでどいつそすてまく仕まうさるうが増とおもひ
げありるりおくに三年ほど前よりして浦里が方へ
来る客あり名ハ万屋の源蔵とて本郷なんの
酒屋の主年ハ四十ニ近ぼひて色くろぐとでぶぐ
と太り。花車風流の時二郎にハ似ても似つかぬ男
なれども。その志ハ優しくて四季折々も相応ニ心を

つけて世話をしけり。今こそあまた初めの内ハ。夜
盃とるく通ひしが心弱きハ女の平生外ふきし
る客もなく。まだ引あきの比よりして。座敷あり
まで色々と厚き情ふ絆されて。末ハ女房と添
遂ぐ。延引るゝね義理づめに。親元へまで渉らせ
て。始終ハせいゆく積り。その浦里ハ妓女ふれど。
稀なる堅気の者なれど。今時二郎よるる縁深く。
逢ひそめしと互の辛苦ふ十面工面しくこん

ても。漸く見世へ出るかうる。思ひ浅とありてハ仕
かうもるし。番頭妓女に表々くと。お逢ひきるも
見えいれる。口びらきをきるかうで。たゞくよくと
胸のうち。どうしと真で時きんふかう添くるさ
かう。どんいゆの始終の野ハ。ゆちらへ徃わバるう
ね身とかくて常々しハ子飼より。郭里に育ちし
妓女気のいと有ぐえてとるべし。されども。おいく
時二郎よ。あひさゝつゝきの胸せまり。いろく

工夫して見ても。御思案ハつきて詮方なし。人窮し
て巧をなすと云。一博識のいかれな詞をかるる
一生の身を任せんと約束して。源蔵が方へ細々と。
書綴つる文を持せて。よくも茶屋で六おかう
るりとわざどだんを恃んで居る 吉六へハイちとごあん
なさいまうト源蔵が店へ行くと。源蔵ハ帳場
に烟草のんで居る。吉六を見つけて 源へ吉六、どんう
わりやア喜方大きまに苦らうぢやうの 吉へ





これハ旦那。ちよつとあちらでお目にかゝりたいと
ござりますト 源へマアくこつちへあがんなさいで。よし
此処じやアまた人が来てるとわるいから。二階へ上
やせう 吉へイヱく私ハそういつてハ居られません。ちよつと
渡して置くおめにかゝりまして 源へるゝさマアいゝわ。
わたしハちやうどお袋も寺めぐりに往てまだ帰らぬ。
そして此ねつに聞てくれともある所ぞ。マアく此方へ
吉へハイさやうならごめんなされましト源蔵が跡

源蔵
吉六

につれ二階へゆく　源「やくハ苦らうだらうと。さぞさぞ
なんぞの手帋でも持て来るのか　吉「さやうで
ござりませぬ。せんて入例の文づかひを待まうとおゐ
しやりましたが。とても文でなくてハころられねへから私ハ
上つて委しくお咄し申て。くはうとおつ走りま
した吉「大しくじりといひるがら浦里が文と申して
かくそのお文ふやア。合点しく書てござりますから
が。此る中からとびく人もあげまして。久しく



お出もなく。夫にちつとお待申こともござりませうが。
御返事も下さりませんで兼ましたから。今日ハ
私をあげました。どうぞちよつと一筆なりと御返事と
下さるやうに。そうしてどうぞいらしやりまし。夫もよく
お聞申てくだされとおつしやりましたトいふうち源義ハ
文を披ひてよみ。未また返し。腰へ挟んで　源「ほほよし
いかなる書やうたが。今迄入るともあるこの八其外
どうで此ろから。いろいろ往て来ることもあるが。商売も

いそがしく。何かふツイマア。夫なりにしておくがコウ
吉どん此間ゆきで聞バ。何かあの小虫がついたといふ
評判だがの。奉公ハもや何もかも委しく知らぬ
ことだが。去三ぞうく。昔も知らぬ昔の似たる人に聞
ふも及ばぬ。五月から十月迄入てありやア。去ふかるほ
るごとれども。今ハモウそうかの氣根もなし。それふ
るかくなる麻をつくして。おふくろふもちきふ昔から
さまさから。マア去年から八知つての通り。めつきく月に
二三度ぐらゐあふ往ねへから。何がどうどうかさかぢり
知りやアしねへ。勿論あの女ハ児どもどうぜんの
時から世話をしておいて。そんなうち気らしん事を。
なさらずでもねへが。少し是なかりやアそれとも又
ねへ。ノウ吉どん。どうぞかくさずきかしてくんねへ。げし
て少さまが言さとるんでさアらんねへかヨ 吉へヘエ そ
りやアぞんじませんが。マアあの浦里さんに おきまりし
ちやア。そんな人に浮名をたてるやうなことハで

ござりませんが。ハテなアト小首を傾ける。是ハ浦里よりよく侍まれて其うへふみの使ちんと南一のちらて来さ人まどめたるくまちをまる 孫「そうろの。まへし人がでも。まんざら稀のわけ宴をいふ物でもわけ勿論。まへ針を棒といふのハ世間のあくりやでござれど。針ほどなことがなけりやア。棒ほどにもマアいつそわけとおいさまうる物が。京何もそ是と聞てどうきるといふ評でもわけがかくさびと。ノウ吉どん聞てくんな

吉「きち 京何も私がおかくしやといふ訳ぢやァござりません。実ハ是ハおあんじなさいますな 孫「マア老さまがそういへバ。それハちげへもあるめへさトいひながら大きな声をして 孫「小僧や吉兵衛を呼びにやれとおらがよしこ。まづ来なわくが サハイ今来ますとうら其処へ持ていく所でござん 孫「早く持てきやれ。小僧ちよつとお初をそうのじやアわけぜトいふうち小僧ちろビハタくと。廣蓋に三ッ物をのせて出来ますと 孫「銚子

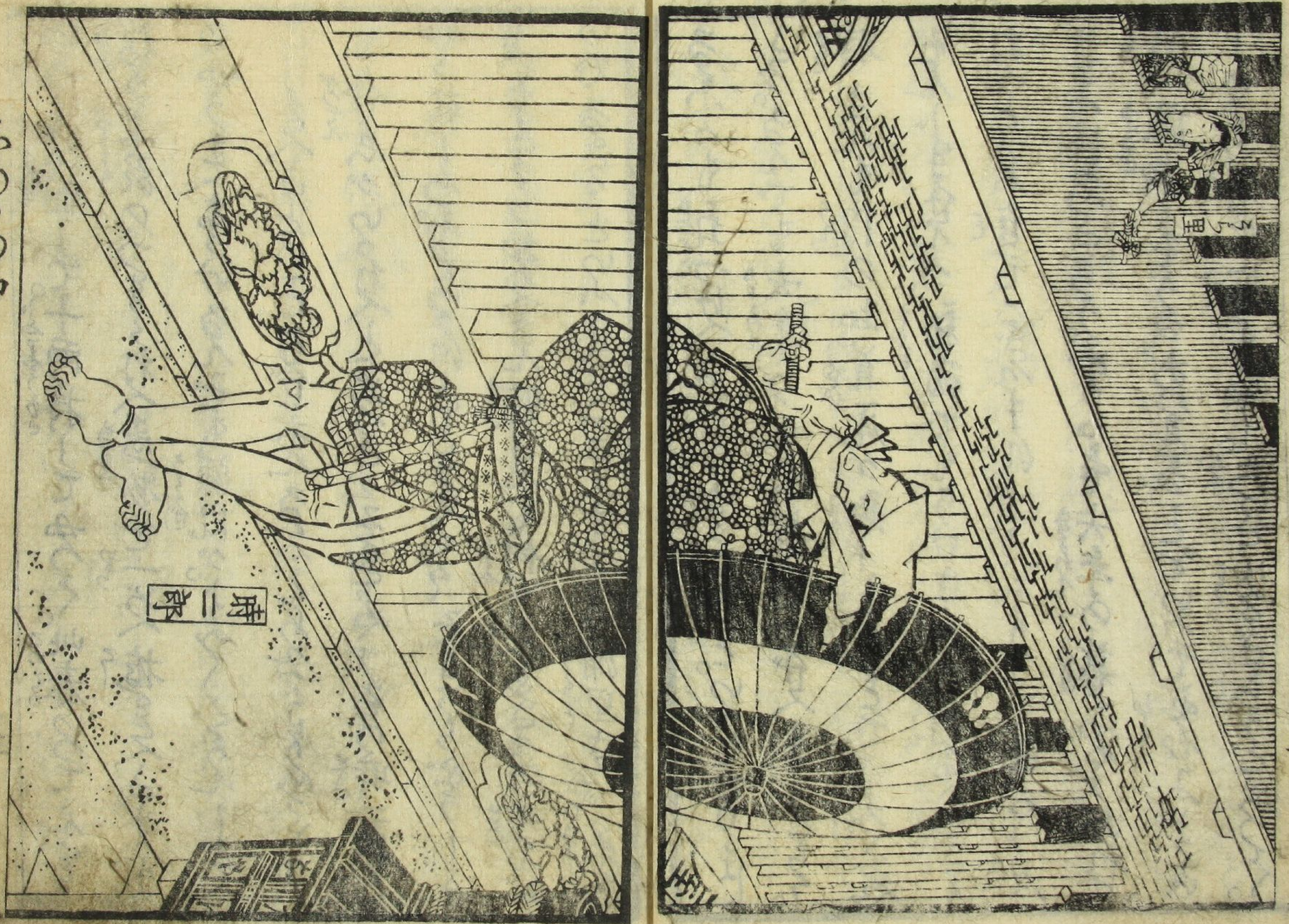
なるくせうぜ。時に吉どん何もわしが一ッ飲でいる
わへ　吉「イヤ旦那およしなされべよふござりやす。夫に
今日ハちつと急ぎまするから　孫「ハテいゝさるのまづ
八ッになるかならずだ。そして相士ハ内にゐるぢやアねへ。
ちよくまアおかんとこんもうろう　ト一ッ飲でさし。夫より
どふしますから一ッ飲わど。吉でも大生酔になり
吉「こりやア旦那誠に御馳走になりまして。大きに酔
となりましたぞ。どうぞおかまいなさいりやすな　孫「十二三ばかり

の酒よ。何もそうよふなる事わしがおれぢやア
こまでがる篭にでも乗ていかれへト大きな声へ一百疋
つゝんでやる　吉「こりやア旦那ありがたうござりやす。毎
度もウおまへの御恩にあづかり。私もモウちようどあし
かけ五年となりますが。吉「イヤ私どもとも旦那
げ。なるべく私らがやうな不調法なもんでござり。そう
気をつけて下さる客人ハござりません　孫「ナニそうでも
あるめへ。ここの世じやアどうしてもおれがよくしれへがマアお

あちらの暖簾じやァ。奉公しちがへても。お袋さんもやァ
なるのさかんにお客もちやうど今年で丸三年足
らけ四わんといふのんどす。始めつからきつして心易く
なつしつけるは昨今の事だすが早イのんどすえ。ナントさう
心安くしても。矢つぱり他人ぐすへいぜ 吉「因縁さ
何をおつしやる。何を私がしらん 孫「オットいふまいく。
お客が何もおわかへとおつても。だんながおつちやこちら
から嗅出して気くさ事もあつたら。気さはァござると

まづめで。あちらをきつてあの子におつちやァ。きづけへ
ハおへるんぞと。実に恨みるのんござせ 吉「イエく さう
いふことじやァござりませんが 孫「ことげがるうァ。はまして
きろせおへる 吉「そんなら おまへさんもまあさうがどうも
まことに浦里さんに私がしたことぞと。おつしやるぐ
まうちやァ。誠に困りませぬと 色く馳走なり。
その上身分せんとひと大きにきづかん小なる 孫「十二それを
気をいつて 少き気のめぐらくみるなるみとこ残

いふものゝ吉「そりやァもう旦那が御如在ハねへけれど。
三「地色しやァござりません。おめへの客人で時ニ扇さん
とやらが。去年ちやうど爰の時分。扇さんも出
夜の文志さんと一座でお出なされましたさ。深「何う
文志といふのハ。アノ春町さんの客人か。吉「さやう
さ。そりやア毎日のやうにお出なさつて居つゞけや
何うも。えびくで大そふいろ〳〵むづかしくありましたが。
アノ何とやらも相方が浦里さんといふもんで来なすや
るふうも来づけへなさいもなからうと。いつておりまし
たが。なんでも去年の冬じぶんでござへましたらう。
時さんも内のお首尾が悪イとやらで。マアろく〳〵
ぞんじませんが。勘当でもうけさんしたか内ハ出ぎざる
わへといふ事でござれます。深「今でそうか。そりやァ六
きやうな法らくさらう。どうアで去年の暮らやァ。おれが
所へ泣出しそうるお前ることをいつて無心をよそ
しくうら。外に客もあるし。ちつと困るかららとおつく。



いつそ工面して十両持してあがく。此春いつてこんだら。京「何ぞ上品のつまらねへ着物を一ツ拵へてさしあげましよう。のあつもたおかけるんでも浦風がよくくわんしやしてこしらへたそのとるぜあんまりくわんがこりいづらうも合点がいかねへとやつたが。それぢやアその時二歩とあげたに。よつぽどつかいくしたやうだぜ。それだらどうして吉「それだらおめへさん時さんも何ぞ文志さんの所よおいでなさるといふ事で。ござへましたが浦里さんが着物

や何ぞもいつそとさんざんして拵へておあげなさいまし。よねもでござへますからね。夫でもおめへ茶屋にもさぐりがあるさうでござりますから。此頃ぢやア時折拵るへ来て何か噂してけへらふとするげなでござりますそ源「そうそうだ。それぢやマアちつとは気休めのうさばらしといふんだよ。けれどトいつてハ居直ど心の内ハおどろくるけれど。殊に去年の金十両工面して持つたのが。今さらことわれさと云へバいよく後もどりも出来ず近イ

うちゆへと思ひ。少しもはやく吉六も戻く家ハ寺と
あので。その内酒もどんく呑でくれバ少しもよく
なり 吉「イヤ旦那様ハモウおいとま申ましたら有がたう
ござりました。今日ハおかみさんハ法ハきりませんか。モシ
なんなら又一夜目ふ上りませうか 係「それさ迄
ど六がりませんが。信旦ちゃんうちにゆくうちを言て
おくんなさいまし 吉「ハイ さやうなら ト二階を下てつれ
へもそ道く 挨拶してかへる「恋の身ハ浮船の

よるべなく眺むる空のかき曇り。身をしる雨の小休なく。
夜と晩傍と花川戸昔時の蛇の目ふ引かへて骨も
あらハの傘をさしてまどく時二京。徨む格子の隅
のかこ。それとしるより浦里が。つける烟草も行燈の。
ひかふ塞がる胸のうち。帯とくくとも手ふ押へて片そハ
きせる烟草入おもんと見てかさ隅の。格子の臺へ
うちかたむ浦「時さん さぞ寒かろう。いろく
よれこともあり。どうぞ逢たいと思ても。人とあぐ

なんだかおそろしいから。おまへ今夜(こんや)おとまりハおよしで
なまよいか。またあまり降(ふ)るからと見(み)て居(ゐ)るのに。
よく来(き)ておくれなさいし子時「なにもせうぢやねへといへ
どやアなるし。毎晩(まいばん)来(き)てもいゝけれど。尚時(どうじ)さんがごんも
おかみさんにも。このごろハ何(なん)だか下女(さけ)のことゝ彼是(かれこれ)といはれても
言(い)はれるもいやだし。亦(また)一ツにハ何(な)だかのゑのといはれ
ともないからえ。びく〳〵来(き)ちやア手(て)めへも悪(まへ)いから
困(こまる)らうと思(おも)つて。己(おれ)をこまへのをまつとこまつく。



二三日ハ居(ゐ)てくれるが。けふハ雨(あめ)も降(ふる)し暗(くら)さハくらし。
マアこんなおりもあるまいかと。ぶら〳〵出(で)かけて来(き)たのよ
浦「アノ子時(とき)さん。おまへさんがあんまり苦(く)らうになさる
から。それだもいろ〳〵くめんをしてくれるが。あたらしいこと
ござり。妹(すまと)ふさんぐんの仕事(し)もありませんが、夕べ
源(げん)さんの所(とこ)へ吉(きち)どんを頼(たの)んでやりましたから。いづれ近(ちか)イ
うちにいくら用(よう)のこともいさい承知(しようち)といふて
よこしますと。此方(こつち)からへ早くや何(なに)か色(いろ)〳〵なことを

にらみて。十まんとやらで有りましたが。所銭そふから出
来ませんけれど。七めへぐらゐハどうか持て来て呉
ますだらう。そふしたらマア茶屋の方へも又まいりも
おつれなさんし。そふすりやアまた跡ハどふでも出来めへ
ものでもありませんから。時へ今そりやア挨拶がよくつて
大きにいゝ。さうして手めへどうても。色く借金も有。
其方をちつとでもかさを付より。そして先づすげ
若者と一めへもうけるがいゝ。かふして来てても。手

処のるりが一だんさびしいやうだ。それならよんびに
狗が一ぺんふるらア。ちよつと行きでも人の目ふ付く
ものだから。前がかぎふ早くうけるがいゝ。浦アイ夫も
そふぞすみずマア。それよりやア。おまへんのおろを
ざらせうと思つく。いろく骨をおつていつて有り
ましたのと時へるかから何までおれが有る者をそれ
ほどまでふ思つくしまふ。礼のひともしもわへ。さよく
死んでも忘れぬわへぞよト涙とおろりと流し

ほんに其合ハ出来ても。どうも聟がねの事に
つけちやア海わへ義理で。お聟もあんまりつまらねへ
から此あいだ山の手の聟の姑の所へいつたらよく
泣つくから。夷講めへまでハ少しハかゝつて食る積
だろう。それが出来りやア。まづどうかなるといふ
おまへが浦へ「そりやアおまへさんの工夫だろう。まちがへもあり
ますめへけれど。おまへを請めへといつてハまだ間もなし。
マアぢきにかハる早イ方をあつらへなさる時ハそりやア



大きにふられましたが。どうも源さんの方からよこすこと
のを。お聟が持つたまゝねへといふことけハ。よく積つて
みなさい。手めへもまだ外に客人も無へ時ぶから
色く世話をしてくれて。去年の約束まで来て
あるハ。お聟もたんどやッから兼ねでゐてさ。今いくら
困つてくだる人のかつて死ねばといつても。其金が持つ
いれるものか。それじやアあんまり冥利がわりいね。
今からして内でもみんなまで待たせるくるくる

うら風
浦里
みどり

てまへ達と云いふ者があるものか。けれど おまへが不実なん
から叢つてゐるので。人の知つて居やアしねへ 浦「それハ
そうでもありませうが。コレちよつとでも二三年なじみの
者だから。ナニねへ一人ぐらゐ此郭里の内へおきやアて。
どうでもしてあげることも出来ませうけれど。いまハ
なかなかそういふ力ハなし。マア源さんだろうがあてと
いふものな物ざますよ。其アノ人からよつて是に
今夜ねへの気にさまねへといはれちやアならぬから。其

たがありませんけれど 時「なにもさのさまがおまへ
のといふことはじやアねへ。よくいふ愚痴とにかせ
浦「アイサござりますさんなにぐちふうとのごへ。おまへら
とへ 時「よく詮もねへことをおぼえるぜト いふところへ。
二階よりかたらそろそろだらくと駈来り浦ざとの
耳へくちをよせて何かいふ 浦「さうさ今か こちらへアイ
たつた今ござりまし 浦「それじやア大そう此処をとれ
つて来さしてくらうの こちらへ「おわくとそうござりませう。

浦「ヲヤだんなへ此ごろハおせわノウ　時「なんぞそんなことに
浦「アノ源さんが来ましたる。紫「大てさまをあハつて
来ましたらが咄に気をもちまして。さつぱり
まへけましたんだ。赤るんのかのといふおなさけ。
紫「大あくどりどト申しやす笑ひをする　時「其外おれハ
まうけるから早く来やヨ　浦「まあきてみなし
残して置もありましたれども。かの謎もおれから。
来るをとつちやアよろこびますから。どうぞ跡



のたんまでおくんなんし。おさらバよト　立あがり
跡に心ハ残れども。小つまをつぐ二階へゆく　浦「
まア源さんよくお出なんしたね　源「あんまりよくも
来ねへのさ。紫「大分におかしいそのおかほをまあしかしほどさ
浦「なんざあさとへ何をへ　源「何ともねへんど直に
こゝを通つて来たのも知られめへで　浦「ム、今格子
でみて。おまへあんまりこちらの客あがらばありませんよ。
あらへ一座の客にちつとまちげへがありまして。

それでアノ人が気さんじな事も夫から今ぶんぶく訳
といつて分りましたのさ　源「さうかそんな事とア志ら
ねへが服からするとちやうど手めへの色をとこの
ようど。たとへどんな間ちげへがあつてふしろぞそまゞ
なふだんさう妓娼も法ねでみるどうらうさ。おつう
んが自身にかけ合をつけるのかむかくしれ　浦「十二むっ
からしれ　源「十二だからしれらいおれがことだ。何もるかッ
さらしの事をつれわへでも縁のと事でず。イヤそれや

手めへといふもんだア。あきれきつたらへ氣のもんだ。
モウ今に年があけるといふ身で色の恋のとマア
いつそ氣ちげへの沙汰ぞぞよ。何も知るめへと思
つて。何もいろく書く吉六とよまうしたが。陸分
こまるでとるかう。どうお設してもご両や五両ハ。分る
めへものでもねへが。その金で色男でもあげられま
ちやア。あんまり此方があけぐもて居らア。そして
いつか當年ふ色くる夏をいつて。手めへの内へきて

親父やおふくろまで引あハせて。僕るが結納までかハくさ。親父から年が明たらおげませうといふ證文までよこしたのハ。ありやアるんど。なんの手んごく。たとへ泣ても笑つても。さういふ定なる急合ありてあるからア。びんぼうゆるぎもさせやアしねへぜ。それいふめへ根生が腐つて居りやア。さうながねへ。ぼんぶん其男に添しても。なからうが今まで流らまて後いはせふ。マアまんぞくじやアからねへから。



そうなつて居るがいゝトいそれく今さら浦里が。疵のつ足ハいひつけの。立ゐもたゝれぬ此場のたんぎ。手て懐に身ハ襟さし俯て居たりしが。何思ひけん涙と立。廊下へいづるとたんのひやうし。禿みどりがかけ来り「モシおいらん春町さんがちよつと身をかくしなんへしよ。おなみまします

郭里乃東雲巻之中

秘方 志ゆんか丸功能書

小半剤入 代百二十四銅

一第一かさのいろきそみむくみを足まで ひまるふ
いえぎれしてはらきかくむねすく風さうきこえたに
のどに氣ふさうやく積るる病まのむよし
かこはまりせたとちいてこし足だるきによし
一血のめぐりはやく持めなくきれすくそるに吉
そらそりむ積つかえむねいたましかにありはるに吉
一しやくきてよ氣とかくむねやけむくびいうるによし
月のふさぬおして或ハ月々月又二三年も經水不通と吉
一のふ大べんむはつしづほう目まいあたつみすり
さんのくくひざらねらさ嘉うくまく妙に吉
男女小児ともがきてに疳下て病のいわば手く下
氣ふさうりて何病ともこもえおらく
付けし病月ひるそく全快するる

此所能書認よく〳〵見合せ我が病に引合せて用ひらるべし 古今撰ぶ所の

いづれの病にも其薬に用ひ合せ服すべし

或は薬を数ありといへども 二年 三年と経ても香りよく

清く風味も変らず 時の薬のめぐみ 其薬をもやすく用ひ

薬と仰 けるにより其のまゝ用ひて 猶おほく 老若

まことに[illegible]薬用ひざる時は やまひにまく 油入りし 合級

ちぶむる元なり 依て此病の ある方は能〳〵此能書に引

合せすこやかに用ひ給ふべし 余は能書に[illegible]

本家　江戸両國横山町三丁目　大坂屋半蔵

取次

両国[illegible]おすや小右衛門　本所[illegible]本町 中山[illegible]　小[illegible]

四ツ谷[illegible]町 [illegible]　浅草[illegible]門 上総屋清吉　本川 [illegible]のや新六

三田[illegible] [illegible]　千住二丁目 [illegible]七　川口 [illegible]

本郷[illegible] [illegible]　[illegible]　[illegible]

諸國津々浦々に弘め所

武州[illegible]村 [illegible]新六　[illegible] 大[illegible]　[illegible]

奉[illegible]村 [illegible]文[illegible]　信州[illegible]町 [illegible]　同[illegible]町 [illegible]

飯田町[illegible] [illegible]　同所 [illegible]

攝州[illegible] [illegible]　同[illegible] 大坂[illegible]　[illegible]

[illegible]長[illegible] 板[illegible]　奥州二本松 [illegible]

武州[illegible] 宗七　[illegible]町 [illegible]　同 下[illegible] [illegible]

同[illegible] 板や庄七　下総[illegible] 八代[illegible]　同 [illegible]町 [illegible]

同横[illegible]村 [illegible]常八　同[illegible]町 [illegible]　同[illegible] [illegible]

同 小松村 [illegible]　同[illegible]村 [illegible]　同[illegible] [illegible]

同[illegible]町 [illegible]　同[illegible] [illegible]

上州[illegible] 新井[illegible]　同[illegible]川 [illegible]

○小児胎毒つよきときは出来ものなどにて其の薬をもちひてうちへおさむる事甚あしゝ○胎毒の薬を用ゆべし金瘡あるときは癒るなり○痘瘡疹の小児さいしよの薬を用ひおかば大ひにかるく一生の病もなし外人の児にくらべみれば格別なり○かんのむしてきの小児もこの薬にて随分よろしく万病をのぞきまた大いにおさまる○ながくつゞけて用ゆれば一日に一度づゝも用ゆべし○此薬は外より出るにもあらず内よりつよく毒をくだしそのほかの毒にもよろしくさまざまの病をいやす○胎毒にて小児のきずものにならざるやう大便を和らげ小便を通じ食物をすゝめ大なる効ある薬なり○胎毒の児にはまづ此薬を用ひて後病のしるしをみるべし

用ひやう

きざみの小児一歳より十歳まで一日に二三度づゝ十歳より廿歳まで一日に三度づゝ此丸薬を用ひてよし



右此薬は私方一家の法にして往古より数年世上に類なき妙薬なり此薬を用ひて病の治せざる事なく上州高崎田町柳沢利右衛門方にて同じき薬を売り出し一向効能なし右似せ薬を用ひ候へば病の重りとなり世上に似せ薬多く出来候間此家の印を御覧の上御求め可被下候

# 解毒養童丸

小児 たいどく一通の妙薬

壹包代百銅

半包代五十銅

此薬はたいどくくだし虫くだし胎毒一とおりの妙薬なり

御薬調合本家 東府隠醫 岡田三折製 〔印〕

賣弘所 江戸西國横山町三丁目 大坂屋半藏

取次 武州熊谷宿 ……